

豊明希望チャペル礼拝

2025/11/2

「命にいたる悔い改め」

使徒 11 : 1～18

ペテロが、異邦人のローマの百人隊長コルネリオのところに遣わされ、コルネリオはじめすべての家族の者たちが洗礼を受けました。



コルネリウスとシモン・ペテロ

イエス・キリストの弟子、シモン・ペテロの元に異邦人(ローマ)でありながら、敬虔な信徒となったコルネリウスが使者を使わし、ペテロを招きます。

ペテロから洗礼を受けた最初の異邦人となりました。ちなみに、日本に「コルネリオ会」という団体があつて、どんな団体かというと、自衛隊のクリスチャンの聖書の勉強会、交わりの団体です。どうしてでしょう。そうです。百人隊長・・・ローマの兵隊だからですね・・・

使徒の働きでもっとも長い扱いだと言いました。ルカは、特に、この出来事を伝える事が特に大事だと考えたと言いました。この書の宛先の、おそらく異邦人のローマの高官のテオフィロにとってというだけでなく、この出来事が、ルカが、先日、ルカの福音書の系図のところで教えられたように、すなわち、アブラハムからの系図ではなく、ルカは、人類の祖アブラハムからの系図を書くことで、キリストの救いが、全人類にとって、関係あることだと・・・そういう意味で、ペテロに神さまから異邦人にも救いが及ぶことが示されたことは、歴史的な転換点だ、素晴らしい大きな出来事なのだと言うことを強調したいのだとおもうわけです。

今日は、そのコルネリオの一応、最後の箇所になります。

今日の箇所は、ペテロが、異邦人に洗礼(バプテスマ)を受けたと言うことが、エルサレム教会に大問題になっていたようであります。それで、ペテロに抗議があつたようです。そのやりとりが、この一連の話の最後にルカは記録しているわけです。最初の箇所を読みます。

「11:1 さて、使徒たちとユダヤにいる兄弟たちは、異邦人たちも神のことばを受け入れたことを耳にした。11:2 そこで、ペテロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちが、彼を非難して、11:3 「あなたは割礼を受けていない者たちのところに行って、彼らと一緒に食事をした」と言った。11:4 そこで、ペテロは彼らに事の次第を順序立てて説明した。」

ユダヤ人なのに、異邦人に、洗礼まで授けた・・・そんなことをしていいのか？と問うたわけです。ちなみに、「使徒達とユダヤにいる兄弟たち」というのは、ユダヤ人に間違いはないですが、全部、クリスチャンです。これは、教会に報告された出来事であります。クリスチャンが、ペテロを非難したというのです。

パウロもそうでしたが、ローマ人への手紙で、ユダヤ人と異邦人の救いについて、先週も教えられたばかりでした。エルサレムのクリスト教会だけでなく、ロー

マのキリスト教会でも、異邦人がクリスチャンになることに、抵抗があったということだと思います。

ただ、エルサレムキリスト教会で問題になったのは、ここを正確に読むと、こういうことをとくに問題にしたというのです。

「あなたは割礼を受けていない者たちのところに行って、彼らと一緒に食事をした」

これであります。洗礼をさずけた、クリスチャンになった、同じ仲間になったということの方が、重大だと思うのですが、なぜか、一緒に食事をしたことが問題になったと言うことです。逆に言えば、クリスチャンになったとしても、一緒に食事をすると言うことはありえないということようです・・・

ペテロが、夢で示されて、色んな動物を見せられて食べろと言われて、その拒否反応は、たしかに、ペテロだけのことでなくて、すべてのユダヤ人クリスチャンにとってもそうだったのがわかります・・・繰り返しますが、ユダヤ人というよりも、ユダヤ人のクリスチャンにとって、クリスチャンにとっても、受け入れ難いことであつたということです。

このあと、18 節までで、また、あの、嫌いな動物の幻の説明をペテロがすることになるのですが、ルカも、これを書きながら、同じ説明を何度も、なぜ書かなければならなかったのか、今回は、「例の夢の説明を彼らにした」とでもいえば、その一文で十分なはずのところを、また、ルカは、あの幻の説明を、この手紙の中にあえて、入れるのです。ちょっと、今一度、並べてみてみましょうか・・・

「10:11 すると天が開け、大きな敷布のような入れ物が、四隅をつるされて地上に降りて来るのが見えた。10:12 その中には、あらゆる四つ足の動物、地を這うもの、空の鳥がいた。」

これは、最初の幻。そして、コルネリオに、そのことを説明したときの説明。そして、今回、エルサレムキリスト教会の皆への説明。今回の箇所を読みます。ルカは、先にも言いましたように、この神の幻が、どれほど大事なことを示しているかを、この使徒の働きを読む、すべての人にも読み、理解して欲しいと思っているのだと思います。ですから、あえて、今一度、読みます。

「11:5 「私はヤッファの町で祈っていました。すると、夢心地になり、幻を見ました。大きな敷布のような入れ物が、四隅をつり下げられ、天から降りて来て、私のところに届いたのです。11:6 その中をよく見ると、地の四つ足の動物、獣、這うもの、空の鳥が見えました。11:7 そして、『ペテロよ、さあ、屠って食べなさい』と言う声を聞きました。11:8 しかし私は、『主よ、そんなことはできません。私は、きよくない物や汚れた物を、まだ一度も口に入れたことはありません』と言いました。11:9 すると、もう一度天から声が返って来ました。『神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。』11:10 このようなことが三回あって、すべての物が再び天に引き上げられました。」

『神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。』

これは、ペテロが、あえて聞かねばならなかった、神のメッセージであり、エ

ルサレムのすべてのクリスチャンが聞かねばならなかったメッセージであり、この書を読む、すべてのクリスチャンが、それが、異邦人であってもユダヤ人であっても、心に深く留めなければならないメッセージなのだと思います。

先ほども、言いましたが、特に、エルサレム教会がこだわった、拒否感をもった、その箇所を特に心に留めたいのです。それは、ペテロが、異邦人と食事をしたと言うことです。洗礼を授けたと言うことはもとより、もっとも拒否感があったのが、彼ら異邦人と仲よくした、食事をして、感情的にも、肩をたたき合うようにして、よかったね、同じクリスチャンになれて、同じ神の民、同じ兄弟姉妹となれたねと心を通わすことへの抵抗です。神さまは、これが大事と言われたのです。

今、イスラエルでは、パレスチナとの間に対立があります。(ガザのヒズボラは、過激派ではありますが・・)

思想的、政治的な対立という以上に、そこには、感情的な対立があるように思えます。こんな団体があることをご存じでしょうか。

「ブリッジフォーピース」という団体です。この団体の目的が、ホームページにありますので、少し長いですが、引用してみます。



「ブリッジフォーピースの働き

1976 年以来、BFP のビジョンは、イスラエルを愛し、クリスチャンとユダヤ人の間に真の愛の関係を築くため、両者の溝に橋を架けることです。私たちは、この関係を通して神にすべての栄光が帰されることを願っています。互いに違いはあっても、聖書に対する愛と、現代における神の預言的計画を認識することによって、相互理解が信頼と尊敬にまで発展していくことが願いです。

神がイスラエルと結ばれた契約（創 17:7）

と、異邦人がイスラエルというオリーブの木

に接ぎ木されるという約束（ロマ 9～11 章）は聖書の真理です。にもかかわらず、ほぼ 17 世紀の間、ユダヤ人とクリスチャンの間には溝がありました。悲しいことに、歴史を通じて多くのクリスチャンが、多くの場合イエスの名においてユダヤ人を迫害し、それを正当化するために神のことばを用いてきました。あまりにも長い間、クリスチャンはこの問題について沈黙を守り、神とユダヤ人との契約関係、またイスラエルと教会に対する神の目的についての理解を欠いてきました。神は、宗派に関係なく、シオンを慰める者としてユダヤ人との間にある溝に立ち、無条件の愛と支援を広げていくよう世界の教会を召しておられると私は信じています（イザ 40:1）。」

クリスチャンの団体なのです。ざっくりは、ユダヤ人伝道です。イスラエルで、そして世界中のユダヤ人に伝道する団体です。しかし、この信条、目的を読みますと、同時に、まさに異邦人とイスラエルとの和解、あるいは、愛し合うことが、

その目的だとしている点です。そして、その（愛し合う）姿こそが、今、ちょうどローマ人への手紙で教えられているように、この世の終わりに、パウロの言うように、すべてのユダヤ人と異邦人が救われるようにと言う、願いであり、目的であるということでもあります。それを実践していこうと。

私たちが、今、イスラエル、あるいは、ガザの為に祈るとき、これが、神の国の目標であり、神の人類救済の最終目的なのだと示されているようにも思うのです。

以前、ある兄弟で、この働きで、イスラエルに行き、彼らの家の修理をしたという話を聞いたことがあります。

その家は、イスラエルの、老人の男性の一人暮らしの家で、家の中でもコートを脱げない老人が、そのボランティアの大工仕事が終わって、メンバーの一人に抱きついて涙を流したというのです。

これが、まず私たち異邦人とユダヤ人とがすべき最初のことだと考えているということだと思います。

ペテロは、お話をして、食事を一緒にして、洗礼を授けて、その時に、神が、聖霊を下してくださり、この私と異邦人との交わりの中に、まさに聖霊が下りた、神が共にいて下さったと、エルサレム教会の方々に説明するのです。最後の箇所を読みます。

「11:15 そこで、私が話し始めると、聖霊が初めに私たちの上に下ったのと同じように、彼らの上に下ったのです。11:16 私は主が、『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは聖霊によるバプテスマを授けられる』と言われたことばを思い起こしました。11:17 ですから、神が、私たちが主イエス・キリストを信じたときに私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが、神がなさることを妨げることができるでしょうか。」11:18 人々はこれを聞いて沈黙した。そして「それでは神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。」

ペテロは、「神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言います。

そこにあった、悔い改めとは、ペテロが自分のことも含めた悔い改めのようにも私には思えるのです。ある牧師が、この箇所では、それでは、そもそも、なぜペテロが、異邦人と食事が一緒に出来たのかと言いまして、それは、イエス様との食事の経験があったからだと言いました。こんな罪深い私と、いつも一緒に食事をしてくださったイエス・キリストを思い出したからだと言いました。そこにある、深い

悔い改めと、同時に、こんな私の罪が赦され受け入れられているその愛の経験です。

ガリラヤに逃げ帰ったペテロを受け入れてくれたあの、復活後のガリラヤ湖畔での食事。エマオの途上での幾人かの弟子達が経





験した、復活のイエス様との食事の出来事(←レンブラント：エマオのキリスト)、そして、最後の晩餐で、裏切るユダも招いて最後まで悔い改めの機会を、愛をもって受け入れる事で示そうとされた主。そんなことを思い出していたというのです。罪人の私を受け入れ食事を一緒にしてくれたイエス様を思えば、異邦人を私が受け入れないと言うことはありえないという確信です。

エルサレム教会のリーダーが、主の兄弟ヤコブとなり、ペテロとならなかつたらしい・・・その原因は、このことが原因ではなかったかとも言われます。

さて、私たちです。今日の箇所から、なぜ救われたか、どのように救われたかを私たちは思いだしたのだと思います。罪人の私をキリストが愛して下さったからです。今週の歩み。証をしたいのです。そして、愛したい、祈りたいのです。愛しつつ証しし、証をしつつ愛するあゆみを、この週、いよいよ続けたいと願うのです。祈りましょう。